

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	海を渡った女性記者・加納幽閑子：『台湾愛国婦人』時代を中心に
Author(s)	下岡, 友加
Citation	表現技術研究 , 18 : 1 - 26
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53860
URL	https://doi.org/10.15027/53860
Right	
Relation	



海を渡った女性記者・加納幽閑子

『台湾愛国婦人』時代を中心に――

下岡 友加

はじめに

愛国婦人会台湾支部機関誌『台湾愛国婦人』（一九〇八・一〇～一九一六・三。全八八巻）は日本統治初期台湾において刊行された（外地）初の女性雑誌である。台湾総督府官房統計課『台湾総督府第一三統計書（第二〇統計書）』（一九一一・二～一九一七・一）に拠れば、最も多い年（一九一四年）で年間八六一七五部が台湾島内に配布されている。創刊二年後には広告を含めて三百頁超の誌面となり、毎号異なる絵入り着色表紙を擁して日本文のみならず、漢文欄も設ける。

創刊号にて、愛国婦人会台湾支部長・大島富子はその刊行目的を「飽くまでも此の会の趣旨を世におし拡めていや榮えに榮えしめんとする」こと、「婦人の履み行くべき道を明らかにして朝夕に執り行ふ家の事々に便りよからしめんとする」ことと述べた。一方、雑誌の代表者であり、愛国婦人会台湾支部主事・台湾総督府財務局稅務課課長である高山仰は台湾独自の課題についてより具体的に言及している。「本島的情勢は内地と其の類を異にし東半部の峻山に蟠居する兇蛮は未だ全く王化に潤はず」「彼等蛮人の兇暴獐惡なる其の惨害の甚しきに至りては美に言語に絶す」故

に此等討伐に殉じたる死者を弔ひ傷者を勞り其の遺族を救護するは戦時の軍人夫れと決して甲乙するべからず」「本島在住婦人の任務や母国の夫れに比して遙かに重し」。すなわち、当時の台湾総督府の最重要課題である「山地討伐（理蕃）」への後方支援を台湾在住女性の「任務」とし、積極的な協力を訴えているのである。『台湾愛国婦人』はそうした総督府の政策施行上のプロパガンダとしての役割を担ったメディアであった⁽¹⁾。

長らく稀覯本であった同誌は、二〇一八年夏、奥州市立斎藤實記念館蔵書の発見により、他機関所蔵分とあわせて全八八巻中八二巻分の所在が明らかとなった⁽²⁾。依然として創刊号を含めた初期六冊が未発見であるが、発見巻については京都・三人社より復刻版が刊行中であり、雑誌刊行期間全体を踏まえた誌面の考察がようやく可能となった段階にある。

この『台湾愛国婦人』において、刊行半ばまで署名入りの記事・作品を最も多く誌面に寄せた女性記者（作家）が、加納幽閑子（ゆかし女）である。愛国婦人会台湾支部職員名簿に拠れば、幽閑子は一九〇九年一月から一九一三年七月まで愛国婦人会台湾支部事務員（後囑託）として雇用されている⁽³⁾。彼女は離職月に刊行された第五六巻（一九一三・七）まで連続的に寄稿を行い、

雑誌の運営を支えた（その他、最終巻にも寄稿があるが、詳しくは後述）。幽閑子の出自については、郷土史家・竹内脩氏の調査により、兵庫県氷上郡（現・丹波市）柏原町出身、柏原織田家臣の末裔・藤原姓加納氏博厚の長女であることが判明している⁽⁴⁾。その他の学歴や生没年等については不明であるものの、彼女には台湾へ渡る以前に『時代思潮』『東京二六新聞』『少女界』『家庭雑誌』への寄稿が、さらに台湾から再び（内地）へ戻った後には、『婦人世界』『我が家』『少女の友』『同仁』『家の光』への寄稿が確認できる（詳しくは論文末尾の【加納幽閑子著作一覧表】を参照されたい）。すなわち、幽閑子には少なくとも一九〇六年から一九三五年まで三〇年に渡る寄稿が確認されるのである。現在では全くの無名の人物であるものの、明治生まれの女性としてはかなり息の長い執筆活動を行った書き手と言えよう。

本稿の目的は次の通りである。まずは『台湾愛国婦人』掲載の加納幽閑子の小説、訪問記事、読者通信欄での応答などの検討から、同誌において幽閑子が果たした役割をつまびらかにしたい。加えて、『台湾愛国婦人』以後の他媒体への寄稿についても可能な限りで追跡し、「継続的なキャリアにつながりにくい職業」（藤本恵⁽⁵⁾）とされる女性記者の仕事の続けた幽閑子の営みから、女性史・出版史にも資する一例を示すこととしたい。

一 『台湾愛国婦人』掲載・幽閑子の文芸創作

現在、本文確認の可能な『台湾愛国婦人』への加納幽閑子の最

初の寄稿は、少女小説「由美子」（第九巻く第一五巻、一九〇九・八〜一九一〇・二。第一〇巻が未発見巻のため、前編三〜五章については未見）である。内容は東京の裕福な家庭で育った少女・山川由美子が父の事業失敗により、母の里である京都近郊の家へ預けられ、そこで皆に心配をかけぬよう気を配り、健気に暮らしていくというものである。由美子は東京の学校で「世にも麗しい模範生」（第一二巻、九〇頁）として教師の覚えもめでたい生徒であったが、預けられた瀬良家においても「同情のある勉強家」の実に立派な、真の女らしい子供」（第一五巻、八九頁）と評価される。由美子の善良な性質は瀬良家の一つ年上の松枝にもよい影響を与え、さらには正月に帰省した京都大学在学中の松枝の兄の目にもとまる。瀬良家のおばあさんが「何と云っても由美子は瀬良家の人にせねばならぬ」（第一五巻、八九頁）と考えるところで小説は閉じられている。少女が味わう零落の悲哀を描くとともに、彼女の賢さゆえに報われるであろう未来が暗示されており、明治期の典型的な「少女不幸物語」「教訓物語」（菅聡子⁽⁶⁾）である。未だ文芸作品の乏しかった初期『台湾愛国婦人』誌上において、「家庭的好読本」（無署名「新年を迎ふ」『台湾愛国婦人』第二巻、一九〇九・一、九頁）を指す同誌誌面にふさわしい、穏当な読み物を幽閑子は読者に提供していると言える。

さらに翌年、「作者が瀕死の病中に在つて一気筆を呵せる」三三枚以上の長篇」（「編輯局より」第三五巻、一九一〇・一〇、一四六頁）と誌上でも紹介されている小説が「女教師」（第三五巻く第四九巻、一九一〇・一〇〜一九一〇・一二）である。内容

は次の通りである。「才色兼備つたら貴女の事よ」（第四一巻、一二〇頁）と同僚から指摘されるような森静子は、尋常小学校四年の女兒を受け持つ新米教師である。しかし、彼女は「女学校出の無経験者」でありながら「多い俸給を貪る憎らしい人」（第三六巻、一一五頁）として、「生徒からは『森先生、森先生』と慕はれたけれども年寄つた女教員達には猜疑と憎悪の標的となつ」（第三六巻、一一三頁）ている。身に覚えのない艶聞を新聞に投書された静子は、それを機に学校を辞め、一緒に暮らしていた脚の不自由な妹・百合子とも別れて、商家の住み込み家庭教師に転じるまでの経緯が描かれた。

静子の実家は元々東京で相当な暮らしをしていたが、父の事業失敗により零落している点、また、彼女が周囲の嫉妬を買うほどの優等生である点、さらに彼女を思う好青年が登場する点、すべて先の少女小説「由美子」と設定は共通している。そのなかで本小説の最大の特徴は、教師生活の具体をかなり露骨に描き込んでいることにある。たとえば、職員室での教師たちの会話として『よせよ。さもしい話は。ハイカラな服装がしたいのも美しい食が喰ひたいのも人間であつて見れば教員だつて同じさ。平田東助閣下だつてまさか二十円未満の月給の中で七円も八円も貯金しろと云やしまいし、いつもく／＼鯛の干物ばかり喰つてた日にや鯛よりも人間の干物が出来上つちまはあ。』（第四七巻、一〇八頁）という一節がある。この会話は一九〇八年第二次桂内閣内務大臣着任後の平田東助によって推進された地方改良運動に基づく内容と考えられる⁽⁷⁾。また直後に、「斯う云ふ浅猿しい言動を見聞きする

がつらさに」外へ出た静子が「誦し馴れた晶子女史の歌」として「秋の風来たる十方玲瓏に空と山野と人と水とに」（第四七巻、一〇九頁）という与謝野晶子『舞姫』（如山堂、一九〇六・一）収録歌を想起していることから、小説の時代背景は発表時からそれほど遠くない、明治四〇年代初頭を反映したものと推定される。

一般に大正期に入ると教師の給与は上昇し、女性教員も増加したとされているが⁽⁸⁾、静子は妹との生活を「僅か十六円の俸給で」（第三五巻、一二一頁）やりくりしており、小学校校長をつとめる伯父の給料についても伯母の口から「真箇まご小学校の先生なんて馬鹿く／＼しい職業ね、あんなに働いてわづか五十円ぢやありませんか」（第三九巻、九五頁）と難じられている。また、静子の生活は「世間のひまな人々が、職業を持つ若い女である処の自分等を見る光つた眼と五月蠅い口」（第四三巻、一三二頁）に終始悩まされ続けている。最終的に静子は噂となつた男性から求婚されており、先に見た少女小説「由美子」同様、微温的な結末の印象は拭えないが、同時代の『青鞥』における女性教師表象にも共通した、「女性の経済的・精神的自立の問題と結びつい」た「苦悩」（米村みゆき⁽⁹⁾）が描かれた小説とは言える。

この幽閑子の「女教師」終了の翌年から、誌上では新たに尾島菊子の長編小説「幼きころ」（第五二巻〜第七三巻、一九一三・五〜一九一四・一二）の連載が開始された。「幼きころ」では、父の罪による数々の理不尽な出来事に見舞われながら、最終的には係累を背負つての自活を決意するまでの若い女性の半生が語ら

れている。「幼きころ」の女性主人公は学歴の不足から教師として奉職することすら困難であったが⁽¹⁰⁾、雑誌は幽閑子の「女教師」、尾島菊子の「幼きころ」と、女性の書き手による女性の自立をめぐる苦闘を描く長編小説を連続して読者に提供した。

その他、幽閑子の創作として重要と考えられるのは、第一四巻（一九一〇・一）の附録小説「春の家」である。ごく短い読み切り小説であるが、〈内地〉から台湾へ移住し、二度目のお正月を迎えようとする日本人家庭の様子が描かれている。小説末尾で、子どもたちは正月に『生蕃の小父様が入来しやる』ことを聞いて喜び騒ぎ出す。「生蕃の小父さんとは主人の弟の清治」のことで、彼は「昨年の九月頃に自ら仕願して警察官吏と成り、当時討伐隊に交ちつて征蕃の為に働いてゐた」（一五九頁）。この人物設定は明らかに台湾総督府の「理蕃」政策の後援を「大任務」⁽¹¹⁾とする愛国婦人会台湾支部の役割を踏まえたものである。実際にはこの「小父さん」は他の人物の会話中に登場するにとどまり、表面的な扱いに過ぎないが、創刊から一年余り（幽閑子自身の渡台から一年）というかなり早い段階で、会（雑誌）の趣旨を踏まえた台湾表象を小説に試みた幽閑子の対応力には一置くべきものがある。

二 『台湾愛国婦人』掲載・幽閑子の台湾見聞記

文芸創作の他、幽閑子は台湾在住者であることを生かして多くの見聞記を執筆している。最初の取材先は第一尋常高等小学校

（「台北の三小学校」第一六〇第一八巻、一九一〇・三―一九一〇・五）であり、そこでは忌憚のない批評が行われている。たとえば、一年生女兒のクラスを受け持つ若い女性教員については「失礼な申分ながらもまだく隙がある、つまり不慣れでいらつしやるのだらう」（第一八巻、一〇一頁）と評し、他の教師についても「松平定信の歴史用掛図に見えた冠物の説明が不充分」（二〇三頁）といった授業進行上の具体的な指摘がある。最終的には八つの教場を參觀した上で「格別、本校の特色と伺つた言語の研究の結果を實際に何ふことが出来かねたのは返す／＼も残念でございます」（二〇五頁）と皮肉とも受けとれる文章で結ばれている。

実は、台湾へ渡る以前にも幽閑子には学校訪問記（「高等附属小学校參觀記」「家庭雑誌」一九〇八・七）の執筆経験がある。その他、家庭訪問記「花散る家」（『家庭雑誌』一九〇八・五）、小説「追懐記」（『家庭雑誌』一九〇九・一）、加えて先に見た小説「女教師」の内容からも、幽閑子自身に小学校教員の前歴があると見てまず間違いない。台湾における訪問先の嚆矢として小学校が選ばれた所以であろう。その後は新起街市場（「台北の市場」第二四巻、一九一〇・一一）、淡水戲館（「淡水戲館の一夜」第三八巻、一九二二・一）、台北医院（「台北医院」第三九巻、一九二二・二）、北投温泉（「浴泉記」第五一卷、一九二二・二）、基隆埠頭（「船の出る日」第五四巻、一九二二・五）など、台北を中心とした各所への訪問記事を執筆した。

これらの幽閑子の記事からは、彼女が質実を旨とする人物だっ

たことがうかがえる。台北在住女性の華美な装いについてはいったいに批判的である（「いかに粗品なりとも絹布でなければ人中に出られぬかのやうに、或は思つてゐる人が無いでもない台北……の華美……（或は其れ丈けの服装をせねばならぬ地位の方のみあらせらるゝ処なのかも知りませぬが）」兔に角内地から初めて来た人人が争つて口にする其ぜいたくな台北」「奮闘主義の婦人」第三卷、一九一・七、四三頁）。逆に質素堅実な女性を取り上げ、称揚する傾向にある（「台湾では一二と指折らるゝ夫君のお名の下ならば、如何な贅沢も御自由である身をいつも乍ら極めて質素な御服装。平民的な態度の其中にも清げな貴婦人の面影が躍如としてゐる夫人」「台北医院」第三九卷、四二頁）。〈内地〉に比して台北の人々の生活水準が一定以上であることへの言及も多い（「子供を負つた女房さん風の婦人迄が風呂敷一ぱいに買物をして行く所をみると何といつても台北はまだくゝ太平なもの。東京ではお米が買へなくつて……お粥が啜れなくつて、一日に五銭の焼芋で家内五人が凌いだといふ話もあるに」「白木と三越」第四二卷、一九一・二・五、六三〜六四頁。「日常生活の裡から放逐された『敗残の人』の姿はみることが出来なかつた。いづれの人顔にもしてもどこかに余裕が見えた」「新公園のかはたれ」第四二卷、一五一頁）。

また、台湾有数の名家（林猷堂氏邸）を訪問して昼食を御馳走になつた際には、食べ慣れない料理のため、「モサくゝ口の中に溜つてどうしても咽喉を越さない」「茶碗の三分の一を済ました頃は、他の婦人連大方平げ盡してゐた」（「台中まで」第一七卷、

一九一・二、一三二頁）といった、自らの滑稽な様子も記す。他にも「私共は台北近郊の遊樂地として、大俗地になりかゝつてゐる北投より感じの散漫な水源地より、はた変化に乏しい圓山公園より、未完成の新公園よりも、一番此処が好きである」（「初夏の苗圃」第五五卷、四二頁）と、自身の実感に基づいた率直な意見を表明する。『台湾愛国婦人』には署名のない「女記者」による訪問記も掲載されているが、それらはあくまで取材対象者の発言記録を主とするのに対して、幽閑子の署名記事はより自由で主観的である。よつて、読者は幽閑子の目に映つた台湾風景を知るだけでなく、幽閑子自身の価値観やその変化をも認識し得る。たとえば、渡台後、台湾で二度目の元旦を迎えた彼女の記事には「正月早々何だか腹が立つのは本島人の店がお正月らしくしてゐない事である」（「台北の正月」第二六卷、一九一・一、一二六頁）といった、あくまで〈内地〉を基準とした価値判断、台湾文化への不理解が見られた。ところが、雑誌の最終巻（「つれづれ日記」第八八卷、一九一六・三）では「お正月に池の睡蓮を眺めるのも南国らしくておもしろい」と台湾風景を楽しむ様子が描かれている。また、「浴泉記」（第五一卷、一九一三・二）では、温泉地の路傍の「樹蔭には湯川にひたる男の裸体姿が幾つも見られた」際、日本人三人の会話として次のような内容が記された。

『まるで原人をみるやうだ。』

『人間もあゝした処はあんまり奇麗なものでもありません

ね。」

『日本人も生蕃のことは余り笑へません。』

三人は面を背けて通つて行つた。(『浴泉記』第五一巻、一九一三・二、八二頁。傍線は下岡、以下同様)

ここでは、被植民者(「生蕃」)を鏡として植民者である日本人の姿が省みられている。さらに、最終巻掲載「つれづれ日記」(第八八巻、一九一六・三)では「内地人」が「薄い端板切二枚を拾つて行かうとした」「土人の辮髪を掴んで曳きずつて」「横頬を厭と云ふ程、打擲した」光景が語られ、「胸が痛くなつて其蹠跟とした哀れむべき土人の姿を正視するに忍びなかつた」こと、「内地人の憤怒の顔を思ひ浮べて何と云ふ暴戻さであらうと嘲り悪んだ」ことが述べられている。そして、この「内地人」の行為を「植民地の政策を妨害する行為だとも思はせられるし、真の宗教心のない危険な人間だとも考へられ」とし、「弱い者いぢめは野蛮時代の遺風である。ことに植民地ではお互の品位を高めて、真に優良な地位を辱しめぬ様にせねばならぬ筈であるのに」(三四く三五頁)と批難した。「土人」、或いは先の引用文中の「生蕃」という用語にも明らかな通り、日本人の優位性について疑いは挟まれていない(すなわち、今日の眼から見れば、ダブル・スタンダードを内面化している)ものの、幽閑子持ち前の観察眼と批判力は、植民地における植民者の在り方に対して、向けられるに至っている。

『台湾愛国婦人』は(内地)の著名な作家や知識人による多く

の寄稿が呼び物としてまずは目を引く媒体である。が、ここでは台湾の事情が必ずしも踏まえられているわけではない。そのなかで在台日本人女性である幽閑子の記事は彼女自身の体験に基づく生の声を記録して⁽¹²⁾、台湾発の女性雑誌としてのローカリテイ、オリジナリティ、リアリティを担保するものとして機能している。

三(内地)雑誌に伍する『台湾愛国婦人』

では、なぜ幽閑子は他の女性記者とは異なり、署名入りの記事を毎号のように発表することができたのか。その理由については以下の二点が考えられる。一つには、彼女が渡台前、既に女性雑誌の記者(寄稿者)としてのキャリアを積んでいたからである。実際、『台湾愛国婦人』第四三巻(一九一二・六)には「本誌の加納ゆかし様と仰有るのは二三年前女学世界や家庭雑誌に書いていらした同姓同名のお方とはちがひますか(東京の白露)」(一七四頁)という読者からの問い合わせもある。また、幽閑子が『台湾愛国婦人』第四巻(一九〇九・三)に発表した少女小説「おはなれの灯」が『少女の友』に剽窃されるという出来事も発生しており、それは読者による次のような投書によって明らかにされた。

▲昨年九月五日発行の少女の友に載つて居る湯原義子様
小説お離れの灯は「昨年三月貴誌に載つて居た加納ゆかし
様の小説おはなれの灯にそっくり其儘です他人様のものを
窃んで我物顔する湯原といふ方は何といふ浅ましい人でせ

う（東京鹿島初子）（「婦人倶楽部・談話室」第二七巻、一九一・二、一〇八〜一〇九頁）

読者との通信欄に掲げられた右の投書に対して、幽閑子は「御深切にありがたう存じます。私も知らないではありませんでし」と回答し、「一字二字、小説中の姓を変へた計りで、趣向も筆の行り方も微塵違はぬ、殊に題さへも其儘な彼作をば、同誌に於て拝見した時、世には不思議な心を持った人もあればあるもの、否、不思議な事があればあるものと思ふと共に、麗々しく其を載せた人々の心持も計り兼ねた事でありました」と記している。さらに、その二ヶ月後には「小説 おはなれの灯に就て」と題した幽閑子の文章が再び読者通信欄に掲げられ、「少女の友編輯主任星野水裏先生に御答へ致します」「今回は拙稿おはなれの灯につきわざわざ長文の御手紙を頂きまして難有御礼申上ます」とした上で次のように続けられた。

なるほど堂々たる少女の友の記者先生が台湾の田舎から出る微々たる本誌如きを一一お目通し遊ばさぬは御尤ものごとですしよし御覧になつたとしても剽窃と知り乍ら御載せになる道理もなし致しますから、本誌第二七巻に掲載しました文が御気に障りましたらば御ゆるしを願ひます。但し、茲に一言お断り致して置きますが、「そをのせた人の心持も計りかねたことでした」と申すのは、「そをのせた人の御心持はどうあらうか」と自ら疑つたに過ぎないので、

「少女の友記者の心中如何」と詰問したのとは聊か意味がちがひます。随つて、相当の考を述よと仰られましても、これは応ずべき筋であるまいかと存ますが如何で御座います。 （幽閑子）（「倶楽部・談話室」第二九巻、一九一・四、一四四頁）

「堂々たる少女の友の記者先生」「台湾の田舎から出る微々たる本誌如き」と皮肉を込めた文章を誌面で公にし、幽閑子は『少女の友』初代主筆の星野水裏に応酬した。残念ながら、幽閑子の「おはなれの灯」が掲載された『台湾愛国婦人』第四巻は未発見のため、剽窃の具体を検証することができない。が、『少女の友』には確かに該当する小説の掲載が確認される上、星野水裏自身が弁明（反駁）の書簡を台湾在住の幽閑子へ出しているという経緯からも、盗用はまず間違いない事実と考えられよう。ちなみに『少女の友』掲載の「お離れの灯」は婚家から戻されて、離れの間に肺病に伏せていた姉の短刀自殺を幼い妹の立場から語ったものである。肺病・出戻り・継子・「片輪」・「不具」といった同時代における典型的な不幸の形象を姉の一身に担わせている点はやや過剰に感じられるものの、少女小説としてはそのない構成と内容と言える。先に確認した幽閑子の創作とも一脈通じる女性の「不幸物語」であり、この剽窃事件によって、彼女の創作が同時代の〈内地〉の一流商業雑誌にも掲載されるような水準にあったことが逆に証明されている。

さらに、幽閑子が『台湾愛国婦人』の記者として活躍の場を得

た第二の理由としては、同誌編集主任・加納豊（一八八五—一九三二）の存在があげられる。幽閑子と豊は兵庫県・柏原出身の同郷である（夫妻である可能性が高いが、確証は得ていない）。二人は台湾へ渡る直前まで『家庭雑誌』（主幹・和田勝彌、家庭雑誌社。一九〇八年五月創刊）において共に寄稿・編集を行っていた。一九〇九年一月中に二人は台湾へ渡り、『台湾愛国婦人』の実務に就いたものと見なされる⁽¹³⁾。すなわち、二人の雑誌編集上の（協同）の働きは（外地）においてもそのまま継続されているのである。『台湾愛国婦人』誌上には次のような編集部による（内地）雑誌への批評も見られる。

○九月の婦人雑誌合評

（海の人）一ツ手元にある分から願ひませう。婦人画報ですかな。

（川の人）賑かな表紙ですなえ。

（野の人）其れをよびものとして居る丈けに表紙にも写真版にも金のかゝつて居ること恐らく此の雑誌に越すものはありますまい。

（山の人）其のかはり議事にはこれぞと実のあるものも無いやうですね。

（川の人）一口に云へば覇氣のない平凡な、そして上品な雑誌ですよ。

（海の人）でもこれ丈け写真を集めた労苦は買つてやらねばなりませんまい。

（野の人）それに扇子のこしらへ方を写真版で示し一寸し説明書きを添へたのなどは面白いと思ひます。

（海の人）お次ぎ婦女界では、

（山の人）みだしの所、大口鯛二先生のお習字、読者の読者欄などに限りなき厭味を認めます。

（海の人）これも売る手段としては仕方ないでせう。

（野の人）内容は豊富ですな。そして婦人の友のやうに家庭にのみ偏らず、さりとて女子文壇や女学界のやうに甘い軽い文字を連ねて或る意味の文学好きを釣る雑誌のやうでもなし、大分編輯者の苦心が認められます。

（川の人）さうかも知れませんが。そのかほりに其れだけ又この雑誌よりうける印象は少いかとおもはれます。

（山の人）つまり特長がないんだね。（後略）（圈点原文。第三五卷、一九一一・一〇、一四七頁）

海川野山の四人（同誌編集部の人員を見る限り、海川野山の内の二人は幽閑子と豊であると推定される⁽¹⁴⁾）は各雑誌の印象を極めて辛辣なたちで語っている。（外地）の一女性団体機関誌であるはずの『台湾愛国婦人』が（内地）の商業女性雑誌を組上に載せてこのような評価を公にするという行為は、一般に考えられる雑誌の性格やヒエラルヒーを覆すかのような挑戦的行為である。しかし、実際には『台湾愛国婦人』は第二六卷（一九一一・一）から与謝野晶子の作品を掲載し始め、その後も彼女と夫・寛の寄稿を常態とするなど、（内地）の著名作家、知識人の寄稿

を毎巻採用して、商業雑誌に何ら遜色のない充実した誌面を実現しつつあった⁽¹⁵⁾。それを可能にしたのは、愛国婦人会台湾支部の後ろ盾である台湾総督府の潤沢な資金力に他ならず、幽閑子も豊もその資金力によって雇われた身であった。ただし、〈内地〉で一通りの雑誌編集実務に通じており、〈内地〉の雑誌に伍する意識や、自ら文芸創作をもし得る筆力を持っていた幽閑子や豊のような存在があつてこそ、『台湾愛国婦人』は〈内地〉雑誌にも決して見劣りしない媒体として編まれえたと考えられよう⁽¹⁶⁾。

同誌は日本統治初期台湾における最大の懸案事業「山地討伐(理蕃)」の後方支援を女性に促す官製プロパガンダ誌であるとともに、〈内地〉の著名な作家、知識人たちの原稿を常時掲載する文芸総合雑誌の貌をも持ち、さらには、在台日本人による寄稿の場、すなわち〈外地〉の「文化的基^{インフラストラクチャー}盤」(日比嘉高⁽¹⁷⁾)として機能している。幽閑子はそうした『台湾愛国婦人』の複合的な性格のいずれにも関わる記者であつた⁽¹⁸⁾。

四 再び〈内地〉へ

—『婦人世界』『我家』『家の光』の寄稿

『台湾愛国婦人』終刊(一九一六・三)後、幽閑子は一九一八年一月から『婦人世界』『我家』への寄稿を開始しており、〈内地〉へ再び戻っていることがわかる。彼女が『婦人世界』に寄せた原稿の多くは、女性の服飾から住宅の間取りの提案までにわたる実用記事であつた(「盛装と半襟」第一三巻第一号、一九一八

・一、「春の髪飾と草履」第一三巻第五号、一九一八・五、「便利な台所と浴室」第一五巻第五号、一九二〇・五、「井上邸のお台所」第一五巻第六号、一九二〇・六など)。そうしたなかで異色なのは、「船の中でお産をした婦人」(第一四巻第一号、一九一九・一)という、台湾行きの船内での体験を語った記事である。航海中の船内で三等客が女兒を無事出産し、皆がそれを祝う話であるが、「船の中で懇意になつた台北の紙商の細君」は、その半年後に「良人と三四人の愛児を残しておいて短刀で自殺」(一〇八頁)したという。女性の短刀自殺は少女小説「おはなれの灯」でも描かれていた設定であり、どこまで事実に基づくのかは不明であるが、生と死が隣り合わせの我々の日常、人の生死のわからなさを読者に感じさせる。幽閑子の渡台経験が生かされた文章である。

『婦人世界』ではその他、「復活」(第一四巻第二号、一九一九・二)、「源氏物語」(第一四巻第三七号、一九一九・三)、七)、「にぎりえ」(第一四巻第九号、一九一九・八)、「人形の家」(第一四巻第一四号、一九一九・一二)などの内外の文学作品(梗概)の紹介も行い、それらは幽閑子の単著『名作物語』(実業之日本社、一九二〇・一二)に収められて刊行された。以上が、『婦人世界』Ⅱ実業之日本社での約三年間にわたる幽閑子の働きである。

一方、『婦人世界』と同時に開始された『我家』への寄稿は一九一八年一月から一九三〇年三月まで足かけ一三年続いた。一般商業雑誌『婦人世界』(一九〇六年一月創刊)とは異なり、『我

か家』は一九一七年三月に創刊された帝國在郷軍人会の機関誌である(19)。同誌の表紙裏には「初めての方へ」との案内書きがあり、雑誌の刊行目的について「日本の将来を考へると、在郷軍人の任務は誠に重い。が在郷軍人に充分その任務を尽くさせるには、たゞ本人だけでなく是非とも併せてその家族をも導くことが肝腎である―これが第一、然し在郷軍人の家族として必要なことは、一般の家庭に於ても亦大切な事ですから、併せて一般家庭も浮華や贅沢や虚栄に流れず、どこ迄も質素勤勉堅実な純日本式の家庭であるやうにといふのが、即ち本誌発行の趣旨」と記されている。

如上の趣旨に沿うかたちで、幽閑子は孝心の厚い人物、誠実勤勉な人物、犠牲的精神に富んだ人物など、道徳上の模範とされる人物の逸話をほぼ毎号のように紹介した。語られる対象は弟を助けようとして溺れ死んだ七歳の少年(「折れた幼い芽」第二七号、一九一八・七)から、母一人子一人の家庭で入営する息子があとを心配するのを逆に諫める六三歳の母(「茶の花のやうに」(二〇)第一〇〇号、一九二五・六)に至るまで、老若男女様々であるが、貧しい家庭の話が圧倒的に多い。いずれも実在の人物として所在地や本名が明示され、本人写真の掲載を伴う場合も見られる。幽閑子の記事は編年体の評伝スタイルではなく、出来事の順序を自在に入れ替え、小説のような描写を伴って人物の行状を分かりやすく再現する。これは小説も書きうる力量を持つ幽閑子だからこそ可能な方法だったと言えよう。各記事で語られる人物は全国各地に渡っており、在郷軍人会各支部から届けられた情報に基づき、幽閑子が再話したものと考えられる(20)。

『台湾愛国婦人』にも見られた幽閑子の辛口批評はここでも健在である(「浮薄で我欲で辛抱気がなくて屁理屈ばかりいひたがる不孝不忠なやくざ青年がふえてゆく今の濁つた世」「頼母しき若木」第三四号、一九一九・一二、二二頁。「他人の事となれば頭痛の種にする癖に、御自分の歪んでいびつな根性を反省の鏡に映してみる事は愚か、わがお出額の鍋炭にはお気がつかれない婦人の多い中」「独楽の心棒」第三六号、一九二〇・二、一四頁。「表面のお洒落ばかりに浮身をやつして、肝心の内部の汚さは鏡に映してみ様ともせぬ模造処女や鍍金娘さんの多い中」「真玉のやうに」第六七号、一四頁)。

幽閑子は「烈婦」「賢母」「節婦」「貞婦」の語を用いてその実例を紹介し、女性に内助の功から社会への積極的な働きかけまでを説く(「人に尊敬され、愛され乍ら一つの事業をやりとげた夫の蔭には、必ず夫に劣らぬ丈けの立派な妻がかくれて居る」「仰がばや巖頭の松」第二二号、一三頁。「この世の中には男子の手でなくては出来ぬ事業が多いですけれども、又女の手を待つてゐる仕事、やさしい女性の心でなければ尽されぬ(…)仕事も中々多いのです」「愛国の女性」第五一号、一九二一・五、一七頁。「善いことは百も承知してゐても、婦人はことに因襲や周囲のおもはくに囚はれがちで、人と違つたことをすゝんでする勇氣にかけて居ります。それはひきようなことです」「四十四の手習ひ」第一〇六号、一九二五・一二、五頁)。先の『台湾愛国婦人』での執筆内容にもあらわれていた、質実を旨とする幽閑子の価値観は、『我家』において一層顕著なかたちで「浮華や贅沢や虚栄



【図1】『我が家』第157号
(1930年3月) 架蔵



【図2】『家の光』第7巻第3号
(1931年2月) 架蔵

に流れず、どこ迄も質素勤勉堅実な」家庭や人物を紹介するに至っている。

『婦人世界』から離れた一九二一年以降には、『我が家』へ「実話」のみならず、「絵噺」（絵付き物語として示した訓話）も寄稿し【図1】、翌年には我が家叢書の一つとして編著『我が家の料理』（帝国在郷軍人会本部、一九二二・二一）も刊行した⁽²¹⁾。また、一九二五年二月一日付『東京朝日新聞』朝刊第一一面「婦人班の打合せ」の記事には参加者として「帝国在郷軍人会 加納幽閑子」の名が記されており、同会の代表的な役割を幽閑子が担っていたこともわかる。

『我が家』から退いた翌年の一九三一年、幽閑子は新たに『家の光』への寄稿を開始した。『家の光』は一九二五年五月、産業組合中央会により、産業組合法発布二五周年記念事業の一つとし

て創刊された。刊行の趣旨は「農業者の協同組織である産業組合の組合員に、協同組合の精神の理解を深め、あわせて農家の老若男女の教養を高めて、農村文化の向上に資するとともに、健全な娯楽を提供すること」⁽²²⁾であった。幽閑子の最初の『家の光』寄稿記事「日本名婦物語」（第七巻第三号、一九三一・二）は巻頭カラー絵入りの掲載である【図2】。偉業を達成した五人の女性（松尾多勢子、乃木大将夫人、和宮、矢島楫子、奥村五百子）の人生の一場面が取り上げられ、各人につき丸一頁から見開き二頁を使用するかたちで紹介されている。ここで語られた女性のうち、言うまでもなく奥村五百子は愛国婦人会の発起人であり、矢島楫子も愛国婦人会の評議員である。さらに、幽閑子には「乃木大将母堂の御墓に詣づる記」（『台湾愛国婦人』第三〇巻、一九一一・五）の執筆経験もある。すなわち、取り上げられた女性た

ちは一般に知名の人物であるだけでなく、幽閑子の『台湾愛国婦人』記者時代の経験から、十分に認識し得る人物でもあった。

その後も一九三五年まで、幽閑子は実在人物（主に女性）の偉業や孝行を紹介する修養記事を同誌に寄稿した。戦前の『家の光』を内容から三期に分けた板垣邦子の区分に従えば、幽閑子の寄稿は第二期「家と村の更生」期（一九三〇年一月～三七年八月）、すなわち「産業組合のみならず、農林当局や農会もしきりに「婦人の覚醒」を促していた」（²³）時期にあたる。そうした「婦人の覚醒」に資する記事の担い手として、既に『我が家』での修養記事執筆一三年のキャリアを持つ幽閑子に白羽の矢が立ったものと考えられよう。

幽閑子の最初の寄稿の前月（一九三一年一月）に印刷部数一〇万部を突破した『家の光』は、一九三五年七月号において百万部普及を達成した。そこで、編集責任者・有元英夫の「大編集部構想」に基づき、「これまで編集の囑託であった加納幽閑子」は「正職員」として新たに登用されたという（²⁴）。文芸家協会編『文芸年鑑 一九三七年版』（第一書房、一九三七・四、二一五頁）の『家の光』編集者欄にも「加納幽閑子」の名前が確認できる。「正職員」として編集部裏方となったことで、逆に幽閑子の署名入り記事は一九三五年一月号を最後に誌面から消えた。

おわりに

以上のように、細かな履歴については未詳の点が多く残されているものの、加納幽閑子は〈外地〉と〈内地〉を行き来した上、文字通り媒体を渡り歩いて、少なくとも三〇年にわたる執筆活動を行った。『台湾愛国婦人』における幽閑子の働きは、最終巻を除けば刊行半ばの第五六巻（一九一三・七）までとはいえず、同誌の複合的な性格（台湾総督府の政策施行上のプロパガンダ・文芸総合雑誌・台湾在住日本人の「文化的基盤」）のいずれにも関わる重要な役割を果たしている。その後、〈内地〉に戻ってからも幽閑子は各雑誌の趣旨に合わせた記事を執筆し続け、少なからぬ部数を誇る媒体（『婦人世界』『我が家』『家の光』）に採用された。なかでも『台湾愛国婦人』同様に、女性・家庭へ向けて国家体制への理解と協力を促す媒体『我が家』（帝国在郷軍人会）において幽閑子が長年重用されたことは特記すべきことである。

幽閑子の執筆内容は、時代が下るにつれて文芸創作から修養記事（実話）へと重点が移行している。また、自由で開明的な近代市民女性像というより、儒教主義的自己犠牲心に基づき、夫、村、地域、ひいては日本社会、国家へ奉仕する行動を行う女性を描くことが主となっていた。彼女の書くものがニーズを失うことがなかったのは、それが明治四〇年代から大正期にかけて確立された家族国家観を礎とし、第一世界大戦後には「文部省や軍部も女性の銃後活動に大きな関心を払」い、「女性の秘められた能力をあらかじめ掘り起こしておくことこそが国家にとって緊要事である」と、確信されていた」（小山静子（²⁵））言説の量産されていく

〈帝国〉日本の動きと足並みを揃えるものだったからと把握することができよう。幽閑子は『台湾愛国婦人』記者経験から、「山地討伐（理蕃）」への支援という「女性の統後活動」の実際についても、十二分に知り得ていた人物であった。

本稿は〈外地〉初の女性雑誌『台湾愛国婦人』の運営を支えた一女性記者の足跡をその前後も含めて可能な限りで追ったものである。不明のままの幽閑子の学歴、彼女の思想の背景などについては、今後さらなる調査・研究を期したい⁽²⁶⁾。

注

文献の引用にあたって旧字は新字に改め、ルビは原則省略した。

- (1) 創刊号は未発見のため、大島・高山の言については、大橋捨三郎『愛国婦人会台湾本部沿革誌』（愛国婦人会台湾本部、一九四二・二）一四六～一四七頁より引用。『台湾愛国婦人』の基本情報については、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の性格——プロパガンダ、そして近代文学発生の場として——」（『県立広島大学人間文化学部紀要』第五号、二〇一〇・二）、上田正行「『台湾愛国婦人』という雑誌の意義」（『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇）國學院大學、二〇一四・二）参照。

(2) 最新の各巻所蔵先については「『台湾愛国婦人』所蔵一覧表」（下岡友加・柳瀬善治編『『台湾愛国婦人』研究論集——〈帝

国〉日本・女性・メディア——』広島大学出版会、二〇二二・三）一〇～一一頁参照。

(3) 名簿上の表記は「加納ユカシ」。大橋捨三郎『愛国婦人会台湾本部沿革誌』（愛国婦人会台湾本部、一九四二・二）七三一頁参照。

(4) 竹内脩氏は丹波市文化財研究会会長、柏原歴史の会会長。篠川直編『柏原織田家臣系譜』（岡林梅次郎発行（非売品）、一八九一・一〇）九六頁に基づく教示。加納家の菩提寺である明顕寺（柏原町）に幽閑子の墓や過去帳記載はない。菩提寺の特定については、西楽寺（柏原町）・滝川秀行住職、西念寺（丹波市氷上町）・亀山住職の教示に拠る。墓所と過去帳記載については、明顕寺・廣崎秀行住職、廣崎香氏、廣崎玉江氏による教示を受けた。

(5) 藤本恵「〈婦人記者〉の仕事と賃金」（浅井清・市古夏生監修、作家の原稿料刊行会編著『作家の原稿料』八木書店、二〇一五・二）五一頁。藤本は明治二三年に登場した女性記者たちの活動について昭和初期までの状況を調査し、彼女たちの多くがごく短期間で記者を辞めていることを指摘する。なお、在台日本人女性記者に関する先行研究として、宮崎聖子「女性植民者と帝国の「知」——台湾における田中きわの——」（松田利彦編『植民地帝国日本における知と権力』思文閣出版、二〇一九・二）がある。一八九一年生まれの女性記者に関する事例であり、主に加納幽閑子よりも後（一九三〇年代）の台湾における活動について明らかにされている。

(6) 菅聡子『少女小説 ワンダーランド―明治から平成まで』

(明治書院、二〇〇八・七)は「教訓物語の代表は「少女不幸物語」です。これは、その名のとおり、かわいそうな少女が実母と別れてさんざん苦勞するお話。母や家から離れると、こんなに大変なんだぞ、と読者をおどし、普通の家庭生活に感謝させ、その大切さを教える効果があったと言われています」(九頁)と説明する。高橋重美「花々の闘う時間―近代少女表象形成における『花物語』変容の位置と意義―」(『日本近代文学』第七九集、二〇〇八・一)

一)は「最初期の儒教的婦徳に頼った訓話や教訓譚はともかく、曲りなりにも近代小説的手法で少女小説を語り始めた明治末から大正にかけての作品群が、打ち続く不幸に為す術も無く翻弄される主人公を量産したのは、受動性を求める当時の少女規範が、行動の再現を基本とする物語の言語形態に馴染まなかったからだ」と論じる。幽閑子の少女小説は「最初期」の性格を残すとともに、この過渡期の方法のなかにあるとも言える。

(7) 平田東助は一九〇九年二月に愛国婦人会本部の顧問に就いており、『台湾愛国婦人』第一五卷(一九一〇・二)巻頭には平田の講話「聖旨の一端に副ひ奉りし老人の功績」が掲載されるなど、会(雑誌)に縁のある人物であった。

(8) 村上信彦『大正期の職業婦人』(ドメス出版、一九八三・一一)は「小学教師」について「明治三十年後に増勢に転じた女教員はその後増えつづける一方で、大正初年には四

万三四一人、全教員の二七・三%を占めるに至った。教師の四人に一人強が女教師になった」(九一頁)とし、「大正十三年の東京市社会局の調査」として教師の平均賃金は「六七円二三銭」(七八頁)と記している。なお、河上婦志子『二十世紀の女性教師―周辺化圧力に抗して―』(御茶の水書房、二〇一四・一二)は、「一九世紀から二〇世紀への移行期に日本の市町村立小学校の女性教師が急増した」が、その要因の一つとして「女性教師の俸給が男性より低かったこと」(二七頁)をあげる。

(9) 米村みゆき「〈女教師〉という想像力―『青鞥』を醸成する(ローカル・インテリ)―」(飯田祐子編著『『青鞥』という場―文学・ジェンダー・〈新しい女〉』森話社、二〇〇二・四)二三五頁。

(10) 「幼きころ」の詳細については、拙稿「〈書く女〉の誕生―『台湾愛国婦人』掲載小説・尾島菊子「幼きころ」―」(『広島大学文学部論集』第八二巻、二〇二二・一二)参照。

(11) 小説「春の家」掲載の第一四巻巻頭には「愛国婦人会台湾支部の既往と将来」という見開き二頁の文章が置かれており、「我台湾支部」の「一大任務」として「本島の三分の二に占居せる生蕃の討伐に従事する隘線上の戦士の負傷者及び遺族を救護するの任あり」と記されている。

(12) その他、幽閑子は「万事秩序を重んずる台湾ではお医者計りか、学校の教師迄も釦で区別してゐるといふ事だ」(「台

北医院」第三九卷、四一頁）、「凡そ何が口惜いとて、手腕なり、頭腦、趣味なりの上に於て自信のある人が時と所を得ずして旅の土地に、張三李四の輩と同じく見られて埋れねばならぬほどの口惜さと悲さがあらうか」（「舞の袖」第五〇卷、六四頁）、「己れの容貌が醜い為に世の中の美しいものを呪ひ、美しい衣服を嘲り、美しい人を白眼視する女がある。／かういふ女は得て地位とか学問とかで人に誇らうとする。そのくせ人に持ち上げられると有頂天になつて了ふ。／夫をあやまるものは斯かる婦人、傲慢な子供に育てるのもかういふ婦人である。／淡泊と非礼をとりちがへるやうな女はわたしは一番嫌ひだ」（「古き手帖の中より」第五六卷、一五頁）と齒に衣着せぬ発言を誌上で公にしている。

(13) 「はじめに」でも述べた通り、幽閑子の愛国婦人会台湾支部事務員の雇用は同年同月（一九〇九年一月）と記録されている。『家庭雑誌』一九〇九年一月号には編集部による「謹賀新年」（三頁）の挨拶があり、名簿には「加納豊」「加納幽閑子」の名があがっているが、同号を最後に幽閑子の寄稿は見られなくなる（豊は一九〇八年一月号を最後の署名入り記事の寄稿とする）。また、愛国婦人会台湾支部だけでなく、台湾総督府にも雇用された加納豊は、民政長官大島久満次宛への台湾「到着届」を一九〇九年一月一九日付で提出している（「加納豊任総督府属」一九〇八年一月二二日（明治四二年永久保存進退（判）第一卷）

『台湾総督府檔案』国史館台湾文献館、典藏号 00001555002 参照）。豊の履歴の詳細については、拙稿「『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の台湾以前／以後―『芦田均日記』を補助線に―」（『国文学攷』第二五一号、二〇二一・一二）参照。

(14) 「台湾支部本部職員」名簿（大橋捨三郎『愛国婦人会台湾本部沿革誌』愛国婦人会台湾本部、一九四二・二、七三〇―七三一頁）並びに『台湾愛国婦人』第一四卷（一九一〇・一）、第二六卷（一九一一・一）、第三八卷（一九一二・一）、第五〇卷（一九一三・一）掲載「愛国婦人会台湾支部」名簿参照。

(15) 稿者は先に「晶子の作品が掲載されない巻に寛の作品が掲載されることが多く、結果として夫婦でなるべく穴のないかたちで雑誌への掲載がほぼ常時なされ」、「晶子と寛は互いを補うことで、夫妻で雑誌の顔となっている」と指摘したことがある（拙稿「新資料『台湾愛国婦人』第六十一巻―与謝野晶子と雑誌の関わりを中心に―」（『日本研究』第二七号、二〇一四・五）。『台湾愛国婦人』における与謝野晶子の寄稿作品の検討は、上田正行「『台湾愛国婦人』と与謝野晶子・素描」（下岡友加・柳瀬善治編『台湾愛国婦人』研究論集―〈帝国〉日本・女性・メディア―」（広島大学出版会、二〇二二・三）において行われている。晶子と寛二人の作品に関する考察については、太田登「台湾愛国婦人」と与謝野寛・晶子の文業（その一）」（『与

謝野晶子の世界』第一四号、二〇一七・三）、同「台湾愛国婦人」と謝野寛・晶子の文業（その二）」（『謝野晶子の世界』第一五号、二〇一七・一〇）がある。

- (16) 加納豊は編集主任をつとめるだけでなく、自身の長編小説「夢」などを『台湾愛国婦人』に寄稿している。「夢」の詳細については、拙稿「『虞美人草』の先へ——『台湾愛国婦人』掲載・加納抱夢「夢」の表象——」（『日本近代文学』第一〇三集、二〇二〇・一一）参照。

- (17) 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』（新曜社、二〇一四・二）一七頁。

- (18) ここで稿者は加納豊や幽閑子の編集部参入が一女性団体機関誌としては異例とも言うべき文芸欄成立の一因と考えているが、与謝野晶子・寛夫妻に直接寄稿を請う書簡を出している雑誌代表者・高山仰の意向（在京記者「与謝野晶子女史を訪ふ」『台湾愛国婦人』第三七卷（一九一一・一二）参照）や、日本統治初期台湾では文芸が読者（会員）を引きつける魅力的なコンテンツであったこと、また、著名作家の寄稿が雑誌の権威付けに益したであろうことなども当然考慮すべき前提である。幽閑子は一九一三年七月をもって愛国婦人会台湾支部事務員（後嘱託）としての雇用を終了するが、同時期に豊も総督府を退職している。ただし、豊は愛国婦人会台湾支部事務員職は継続し、雑誌終刊まで編集を担当した。加納家における何らかの家庭上の事情により、幽閑子の方が雑誌刊行途中で同誌記者職を離れざる

を得なかつたか。「熱心なる読者諸君の希望に副ふ」ことを目的に第二二卷（一九一〇・九）より開始された読者通信欄「婦人倶楽部」（或いは「読者倶楽部」「倶楽部」）は幽閑子の離職直後の第五七卷（一九一三・八）で終了し、以後復活することはなかった。これは幽閑子の働きの大きさがうかがえる誌面上の変動である。また、記者離職後であるにもかかわらず、『台湾愛国婦人』最終巻（第八八巻）への幽閑子の寄稿が見られるのは、同誌における彼女の働きを踏まえた豊の慇懃に拠るものと考えられる。

- (19) 帝国在郷軍人会は会の創立（一九一〇年一月）以来、既に月刊機関誌『战友』を発行していたが、「在郷軍人の家族の読物たると共に、一般家庭の読物としよう」との目的のもと、新たに『我が家』も発行し始めたという（帝国在郷軍人会三〇年史編纂委員『帝国在郷軍人会三〇年史』帝国在郷軍人会本部、一九四四・三、一二二頁参照）。在郷軍人会は「現役として服役していない軍人の団体で、在郷軍人と軍人遺家族の福利厚生や在郷軍人の戦時動員準備をおもな目的とし、「創立当時約一〇〇万人、一四年（大正三）からは海軍軍人も加え、三〇年代には約三〇〇万人の在郷軍人を擁した」（巧刀俊洋「在郷軍人会」下中弘編『日本史大事典』第三巻、平凡社、一九九三・五。五〇一頁）。

- (20) 例外として幽閑子が直接訪問取材した「西伯利独旅」（第三三号、一九一九・一一）、「この母この娘」（第七二号、

一九二三・二）、「ひがし筑摩の兵隊寡婦さん」（第九一
号、一九二四・九）、「日本一の百姓の妻」（第一四三号、
一九二九・一）のような記事もある。

(21) 第八五号「編輯だより」（一九二四・三、四八頁）には「加
納先生の『我が家の料理』頗るの好評で非常な御注文なの
ですが、絶本になつたため長く多くの皆様に御迷惑をか
けました。普通のことであるなら、こんな御迷惑をお掛け
しないのですが、実は去年の地震の時の火事ですつかり原
版を焼いて了つたのです」との事情が記されている。

(22) 「はしがき」『家の光六〇年史』（家の光協会、一九八六
・三）参照。

(23) 板垣邦子「『家の光』にみる農村婦人―一九二五年―一九
四五年―」（近代女性史研究会『女たちの近代』柏書房、
一九七八・七）三一六頁。板垣に拠れば、農山漁村経済更
生運動（一九三〇年に始まった農業恐慌への対策）におい
て「あくまで、主婦としての本分を忘れず、農を愛し農を
楽しみ、いたずらに都会生活に憧れもせず、堅実に家や村
の更生に努力する婦人こそが農村の良妻賢母であつた」（三
一六―三一七頁）という。

(24) 『家の光五〇年の人と動き』（家の光協会、一九七六・
一）二〇三頁。その他、『家の光の四〇年』（家の光協会、
一九六八・一二）の「昭和二年 役職員名簿」「家の光」
職員名一〇四名のなかにも「加納幽閑子」の名が確認でき
る（八四頁）。なお、現在の家の光編集部編集長・中本英

明氏からは、編集部並びに人財部には加納幽閑子に関する
記録は残されていないとの回答を受けた（二〇二二年二月
二二日付 E-mail）。

(25) 小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、一九九一・
一〇）一一一、一一六頁。ただし、小山は「女が妻・母役
割を果たすことが国家の発展に結びつくとする考え方は、
なにも家族国家観と関係しなくとも成立するものなのであ
る」（五八頁）という立場をとっている。片野真佐子「良
妻賢母主義の源流」は、「問題は、女性の自立への志向が、
日本が近代化への歩みを開始しようとするのと軌を一にし
て、国家に対する自発的忠誠心に転化せしめられ、国家に
吸収されていくことになつた点にある。」「良妻賢母論は、
そのような女性を形づくる観念的支柱となつた」と指摘す
る（近代女性史研究会『女たちの近代』柏書房、一九七八
・七）三四頁。

(26) わずかに幽閑子自身の年齢や履歴、家族構成が何われる記
述として「古き手帖の中より」『台湾愛国婦人』第五六巻、
一九一三・七）に「明治といふ二文字のうちに過去二十幾
年の我が存在して居る」（二二頁）とあり、この記述を踏
まれば、幽閑子は一八八〇年代後半から一九九〇年頃ま
での生まれと推定される。また、「つれづれ日記」（『台
湾愛国婦人』第八八巻、一九一六・三）には「六つになる
息子」や「主人」「親戚の一同」の存在が記されている。
「震災私記 母の骨をまもりつゝ」（『我が家』第八〇号、

一九二三・一一)には三人の子と母と妹と一緒に「十人近い家族」(三三頁)で暮らしている幽閑子の生活が語られている。盲目の母は関東大震災発生からほどなくして亡くなったという。また、単著『名作物語』(実業之日本社、一九二〇・一二)の「はしがき」には、「中国の、ある田舎町の小学校を出たばかりの頃でした。文学を熱愛した今は世に亡い叔父の書齋へ、隙さへあれば忍び込んで、手当たり次第に書物を読みかちつてみた私」の様子が記されている。ちなみに、アララギ派・島木赤彦の弟子である歌人・加納暁(本名・巳三雄。一八九三―一九三〇)は幽閑子の家系と墓所(柏原町小峠)を同じくする親戚関係にあたる(加納家菩提寺である明顕寺における現地調査に拠る)。

(しもおか ゆか、広島大学大学院人間社会科学科准教授)

【加納幽閑子著作一覧表】

目次と本文のタイトル・筆名表記が異なる場合には、本文の方を採用し、『台湾愛国婦人』読者通信欄での応答については省略した。(☆については本人であるとの確証を得られていないが参考のため記した)。ジャンルは本文の記載に従い、記載のないものは稿者が補った。

発表年月日	筆名	タイトル (ジャンル)	発表誌
1906.3.5	加納ゆかし	「雪どけ小路」 (短歌)	『時代思潮』第3巻第26号
1908.5.1	加納ゆかし	「花散る家」 (訪問記)	『家庭雑誌』41年5月号
1908.5.1	女ゆかし女	「白梅」 (詩)	『家庭雑誌』41年5月号
1908.5.15	幽閑女史☆	「小き理想の家庭」 (紹介)	『女学世界』第8巻第7号
1908.6.1	加納ゆかし女	「正吉の猫」 (御伽小説)	『家庭雑誌』41年6月号
1908.6.9	加納幽閑子	「月収三十円的生活法」 (実用記事)	『東京二六新聞』第三面
1908.6.10	加納幽閑子	「月収三十円的生活法」 (実用記事)	『東京二六新聞』第三面
1908.7.1	加納ゆかし女	「高師附属小学校参観記」 (訪問記)	『家庭雑誌』41年7月号
1908.7.1	ゆかし女	「わが家の花」 (詩)	『家庭雑誌』41年7月号
1908.7.1	加納ゆかし女	「正吉の猫」 (御伽小説)	『家庭雑誌』41年7月号
1908.8.1	加納ゆかし女	「幸ちやん」 (をさな草紙)	『家庭雑誌』41年8月号
1908.8.1	加納ゆかし女	「おのころ島」 (詩)	『家庭雑誌』41年8月号
1908.8.1	加納ゆかし	「机上寸評」 (書評)	『家庭雑誌』41年8月号
1908.9.1	加納幽閑子	「幸ちやん」 (をさな草紙)	『家庭雑誌』41年9月号
1908.9.1	幽閑子	「小雀」 (童謡)	『家庭雑誌』41年9月号
1908.9.1	加納ゆかし女加納	「少女物語」 (少女小説)	『少女界』第7巻第9号
1908.10.1	幽閑子	「独唱家藤井環夫人を訪ふ」 (訪問記)	『家庭雑誌』41年10月号
1908.11.1	加納幽閑子	「小坊」 (小説)	『家庭雑誌』41年11月号
1908.12.1	加納ゆかし	「古城物語」 (をさな草紙)	『家庭雑誌』41年12月号
1908.12.1	加納幽閑子	「水道橋」 (小説)	『家庭雑誌』41年12月号
1909.1.1	幽閑子	「月収三十円的生活法」 (実用記事)	『家庭雑誌』42年1月号
1909.1.1	加納幽閑子	「追懐記」 (小説)	『家庭雑誌』42年1月号
1909.3.15	加納ゆかし	「おはなれの灯」 (少女小説) ※未見	『台湾愛国婦人』第4巻
1909.8.15	加納ゆかし	「由美子」 (少女小説)	『台湾愛国婦人』第9巻
1909.9.15	加納ゆかし	「由美子」 (少女小説) ※未見	『台湾愛国婦人』第10巻
1909.10.15	加納ゆかし	「由美子」 (少女小説)	『台湾愛国婦人』第11巻
1909.11.15	加納ゆかし	「由美子」 (少女小説)	『台湾愛国婦人』第12巻
1910.12.15	加納ゆかし	「由美子」 (少女小説)	『台湾愛国婦人』第13巻
1910.1.15	ゆかし女	「春の家」 (小説)	『台湾愛国婦人』第14巻
1910.2.15	加納ゆかし	「由美子」 (少女小説)	『台湾愛国婦人』第15巻
1910.3.15	加納幽閑子	「台北の三小学校」 (訪問記)	『台湾愛国婦人』第16巻
1910.4.15	加納幽閑子	「台北の三小学校」 (訪問記)	『台湾愛国婦人』第17巻
1910.5.15	幽閑子	「勿来関」 (琴唄)	『台湾愛国婦人』第18巻

1910.5.15	加納幽閑子	「台北の三小学校」(訪問記)	『台湾愛国婦人』第18巻
1910.6.15	加納幽閑子	「台北の三小学校」(訪問記)	『台湾愛国婦人』第19巻
1910.8.15	幽潤女史☆	「負傷兵」(小説)	『台湾愛国婦人』第21巻
1910.9.15	加納幽閑子	「台北の三小学校」(訪問記)	『台湾愛国婦人』第22巻
1910.11.15	加納幽閑子	「台北の市場」(雑録)	『台湾愛国婦人』第24巻
1910.12.15	加納幽閑子	「台北の歳暮」(雑録)	『台湾愛国婦人』第25巻
1911.1.1	加納幽閑子	「台北の正月」(雑録)	『台湾愛国婦人』第26巻
1911.2.1	加納幽閑子	「台中まで」(雑録)	『台湾愛国婦人』第27巻
1911.3.1	加納ゆかし	「台中まで」(雑録)	『台湾愛国婦人』第28巻
1911.5.1	加納幽閑子	「乃木將軍母堂の御墓に詣づる記」(訪問記)	『台湾愛国婦人』第30巻
1911.5.1	幽閑子	「喜劇 衣裳くらべ」(脚本)	『台湾愛国婦人』第30巻
1911.7.1	幽閑子	「奮闘主義の婦人」(訪問記)	『台湾愛国婦人』第32巻
1911.10.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第35巻
1911.11.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第36巻
1911.11.1	幽閑子	「雑記帖より」(雑録)	『台湾愛国婦人』第36巻
1911.12.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第37巻
1911.12.1	幽閑子	「雨の本願寺」(雑録)	『台湾愛国婦人』第37巻
1912.1.1	加納幽閑子	「枋橋ゆき」(訪問記)	『台湾愛国婦人』第38巻
1912.1.1	加納幽閑子	「淡水戯館の一夜」(雑録)	『台湾愛国婦人』第38巻
1912.2.1	幽閑子	「台北医院」(雑録)	『台湾愛国婦人』第39巻
1912.2.1	加納ゆかし	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第39巻
1912.3.1	加納ゆかし	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第40巻
1912.4.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第41巻
1912.5.1	幽閑子	「白木と三越」(雑録)	『台湾愛国婦人』第42巻
1912.5.1	加納幽閑子	「新公園のかはたれ」(雑録)	『台湾愛国婦人』第42巻
1912.6.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第43巻
1912.7.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第44巻
1912.8.1	加納幽閑子	「ひとやの花」(お伽草紙)	『台湾愛国婦人』第45巻
1912.9.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第46巻
1912.10.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第47巻
1912.11.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第48巻
1912.12.1	加納幽閑子	「女教師」(小説)	『台湾愛国婦人』第49巻
1913.1.1	加納幽閑子	「舞の袖」(訪問記)	『台湾愛国婦人』第50巻
1913.2.1	幽閑子	「浴泉記」(雑録)	『台湾愛国婦人』第51巻
1913.3.1	加納幽閑子	「歳暮から正月へ」(雑録)	『台湾愛国婦人』第52巻
1913.5.1	加納幽閑子	「船の出る日」(雑録)	『台湾愛国婦人』第54巻
1913.6.1	加納ゆかし	「初夏の苗圃」(雑録)	『台湾愛国婦人』第55巻
1913.7.1	加納幽閑子	「古き手帖の中より」(雑録)	『台湾愛国婦人』第56巻
1916.3.1	加納幽閑子	「つれづれ日記」(雑録)	『台湾愛国婦人』第88巻
1918.1.1	幽閑子	「盛装と半襟」(実用記事)	『婦人世界』第13巻第1号

1918.1.1	加納幽閑子	「白銀と黄金と珠玉と」 (実話)	『我家』第11号
1918.2.1	加納幽閑子	「この母此子」 (実話)	『我家』第12号
1918.3.1	幽閑子	「雨ゴオトと半ゴオト」 (実用記事)	『婦人世界』第13巻第3号
1918.3.1	加納幽閑子	「宝冠章の光輝」 (実話)	『我家』第13号
1918.4.1	幽閑子	「春の髪飾と草履」 (実用記事)	『婦人世界』第13巻第5号
1918.4.1	加納幽閑子	「運はどこから」 (実話)	『我家』第14号
1918.6.1	加納幽閑子	「薰るさつきの風」 (実話)	『我家』第15号
1918.7.1	幽閑子	「浴衣と夏帯の配合」 (実用記事)	『婦人世界』第13巻第8号
1918.7.1	加納幽閑子	「折れた幼い芽」 (実話)	『我家』第17号
1918.8.1	幽閑子	「夏の半巾と香水と指輪」 (実用記事)	『婦人世界』第13巻第9号
1918.8.1	加納幽閑子	「緑綬褒章を戴く迄」 (実話)	『我家』第18号
1918.11.1	幽閑子	「流行の常着と帯と」 (実用記事)	『婦人世界』第13巻第13号
1918.11.1	幽閑子	「谷間の姫百合」 (実話)	『我家』第21号
1918.12.1	幽閑子	「仰がばや巖頭の松」 (実話)	『我家』第22号
1919.1.1	加納幽閑子	「船の中でお産をした婦人」 (雑録)	『婦人世界』第14巻第1号
1919.1.1	幽閑子	「流行の足駄と鼻緒」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第1号
1919.1.1	幽閑子	「哀れにもけなげな人生の勇者」 (実話)	『我家』第23号
1919.2.1	幽閑子	「流行の丸髻と髪飾」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第2号
1919.2.1	幽閑子	「復活」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第2号
1919.2.1	幽閑子	「大山の麓に咲く花」 (実話)	『我家』第24号
1919.3.1	幽閑子	「日本服の改良問題」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第3号
1919.3.1	幽閑子	「源氏物語」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第3号
1919.3.1	幽閑子	「忠婢笹島つね女」 (実話)	『我家』第25号
1919.3.5	加納幽閑子	「文壇の明星と謝野晶子夫人」 (雑録)	『婦人世界』第14巻第4号
1919.4.1	幽閑子	「源氏物語」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第5号
1919.4.1	加納幽閑子	「日本服の改良問題 (二)」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第5号
1919.4.1	幽閑子	「忠婢笹島つね女」 (実話)	『我家』第26号
1919.5.1	幽閑子	「日本服の改良問題 (三)」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第6号
1919.5.1	幽閑子	「源氏物語」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第6号
1919.5.1	加納幽閑子	「螺鈿の手匣」 (少女小説)	『少女の友』第12巻6号
1919.5.1	幽閑子	「忠婢笹島つね女」 (実話)	『我家』第27号
1919.6.1	加納幽閑子	「源氏物語」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第7号
1919.6.1	幽閑子	「日本服の改良問題 (四)」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第7号
1919.6.1	幽閑子	「花も実も」 (実話)	『我家』第28号
1919.7.1	幽閑子	「日本服の改良問題 (五)」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第8号
1919.7.1	幽閑子	「源氏物語」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第8号
1919.7.1	加納幽閑子	「湯谷に咲く白百合の花」 (実話)	『我家』第29号
1919.8.1	幽閑子	「日本服の改良問題 (六)」 (実用記事)	『婦人世界』第14巻第9号
1919.8.1	幽閑子	「にごりえ」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第9号
1919.8.1	幽閑子	「今尊徳翁」 (実話)	『我家』第30号

1919.9.1	幽閑子	「最後の勝利者」 (実話)	『我家』第31号
1919.10.1	幽閑子	「匂ひまさる白菊の花」 (実話)	『我家』第32号
1919.11.1	幽閑子	「西伯利独旅」 (実話)	『我家』第33号
1919.12.1	加納幽閑子	「人形の家」 (名作物語)	『婦人世界』第14巻第14号
1919.12.1	幽閑子	「頼母しき若木」 (実話)	『我家』第34号
1920.1.1	幽閑子	「古家を洋風住宅に」 (実用記事)	『婦人世界』第15巻第1号
1920.1.1	幽閑子	「尊き心の持主」 (実話)	『我家』第35号
1920.2.1	加納幽閑子	「罪と罰」 (名作物語)	『婦人世界』第15巻第2号
1920.2.1	幽閑子	「独楽の心棒」 (実話)	『我家』第36号
1920.3.1	幽閑子	「諫早の孝子」 (実話)	『我家』第37号
1920.4.1	加納幽閑子	「庵治の節婦へ」 (実話)	『我家』第38号
1920.4.1	加納幽閑子	「女の一生」 (名作物語)	『婦人世界』第15巻第4号
1920.5.1	加納幽閑子	「便利な台所と浴室」 (実用記事)	『婦人世界』第15巻第5号
1920.6.1	幽閑子	「此の子の母」 (実話)	『我家』第40号
1920.6.1	幽閑子	「井上邸のお台所」 (実用記事)	『婦人世界』第15巻第6号
1920.7.1	幽閑子	「どんな台所が便利か」 (実用記事)	『婦人世界』第15巻第7号
1920.8.1	幽閑子	「米国式の簡易住宅」 (実用記事)	『婦人世界』第15巻第8号
1920.8.1	加納幽閑子	「暖い大きな手」 (実話)	『我家』第42号
1920.10.1	幽閑子	「丈夫な靴下の編み方」 (実用記事)	『婦人世界』第15巻第10号
1920.11.1	加納幽閑子	「真の幸福を捕へ得た婦人」 (実話)	『我家』第45号
1920.12.10	加納幽閑子	『名作物語』	実業之日本社
1920.12.1	加納幽閑子	「雪をれ笹」 (実話)	『我家』第46号
1921.2.1	加納幽閑子	「土の恩恵」 (雑録)	『我家』第48号
1921.3.1	加納幽閑子	「最後の勝利者」 (実話)	『我家』第49号
1921.4.1	加納幽閑子	「あばら屋の淑女」 (実話)	『我家』第50号
1921.5.1	加納幽閑子	「愛国の女性」 (実話)	『我家』第51号
1921.7.1	加納幽閑子	「双葉の梅檀」 (実話)	『我家』第53号
1921.7.1	幽閑子	「光明の方へ」 (農村絵噺)	『我家』第53号
1921.8.1	幽閑子	「光明の方へ」 (農村絵噺)	『我家』第54号
1921.9.1	加納幽閑子	「大島の賢母」 (実話)	『我家』第55号
1921.10.1	加納幽閑子	「偉大な嬰兒」 (実話)	『我家』第56号
1921.10.1	加納幽閑子	「光明の方へ」 (農村絵噺)	『我家』第56号
1921.11.1	加納幽閑子	「薄馬鹿おてつ」 (農村絵噺)	『我家』第57号
1921.12.1	加納幽閑子	「薄馬鹿おてつ」 (農村絵噺)	『我家』第58号
1921.12.1	加納幽閑子	「泥中の蓮」 (実話)	『我家』第58号
1922.1.1	加納幽閑子	「薄馬鹿おてつ」 (農村絵噺)	『我家』第59号
1922.1.1	加納幽閑子	「孝行納豆売」 (実話)	『我家』第59号
1922.2.1	加納幽閑子	「薄馬鹿おてつ」 (農村絵噺)	『我家』第60号
1922.3.1	加納幽閑子	「光明を撒いてゆく人」 (実話)	『我家』第61号
1922.3.1	加納幽閑子	「薄馬鹿おてつ」 (農村絵噺)	『我家』第61号

1922.4.1	加納幽閑子	「斯かる婦人こそ」 (実話)	『我家』第62号
1922.4.1	加納幽閑子	「最後のもの」 (農村絵噺)	『我家』第62号
1922.6.1	加納幽閑子	「暗闇の裡から」 (実話)	『我家』第64号
1922.6.1	加納幽閑子	「最後のもの」 (農村絵噺)	『我家』第64号
1922.7.1	加納幽閑子	「最後のもの」 (農村絵噺)	『我家』第65号
1922.7.1	加納幽閑子	「仏陀のやうに」 (実話)	『我家』第65号
1922.8.1	加納幽閑子	「炭山に輝く一珠」 (実話)	『我家』第66号
1922.8.1	加納幽閑子	「最後のもの」 (農村絵噺)	『我家』第66号
1922.9.1	加納幽閑子	「真玉のやうに」 (実話)	『我家』第67号
1922.9.1	加納幽閑子	「最後のもの」 (農村絵噺)	『我家』第67号
1922.10.1	加納幽閑子	「残るひかり」 (実話)	『我家』第68号
1922.10.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第68号
1922.11.18	加納幽閑子編	『我家叢書 我家の料理』	帝国在郷軍人会本部
1922.11.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第69号
1922.11.1	加納幽閑子	「真の富者」 (実話)	『我家』第69号
1922.12.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第70号
1923.1.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第71号
1923.2.1	加納幽閑子	「この母この娘」 (実話)	『我家』第72号
1923.2.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第72号
1923.3.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第73号
1923.4.1	加納幽閑子	「河口愛子女史のはなし」 (実話)	『我家』第74号
1923.4.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第74号
1923.5.1	加納幽閑子	「人間の貞婦」 (実話)	『我家』第75号
1923.5.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第75号
1923.5.1	加納幽閑子	「河口愛子女史のはなし」 (実話)	『我家』第75号
1923.6.1	加納幽閑子	「泥沼」 (農村絵噺)	『我家』第76号
1923.6.1	加納幽閑子	「河口愛子女史のはなし」 (実話)	『我家』第76号
1923.7.1	加納幽閑子	「淋しけれども」	『我家』第77号
1923.8.1	加納幽閑子	「河口愛子女史のはなし」 (実話)	『我家』第78号
1923.9.1	加納幽閑子	「猛火のなかに」 (実話)	『我家』第78号
1923.10.1	加納幽閑子	「丸亀の兵隊媼さん」 (実話)	『我家』第79号
1923.11.1	加納幽閑子	「母の骨をまもりつゝ」 (震災私記)	『我家』第80号
1924.1.1	加納幽閑子	「丸亀の兵隊媼さん」 (実話)	『我家』第83号
1924.2.1	加納幽閑子	「沮洳のなかに」 (実話)	『我家』第84号
1924.2.1	加納幽閑子	「鼠と鶏と猫」 (雑録)	『我家』第84号
1924.3.1	加納幽閑子	「祖国のために」 (実話)	『我家』第85号
1924.4.1	加納幽閑子	「地上に樂園をつくる人」 (実話)	『我家』第86号
1924.5.1	加納幽閑子	「地上に樂園をつくる人」 (実話)	『我家』第87号
1924.5.1	加納幽閑子	「荊棘の路」 (農村絵噺)	『我家』第87号
1924.6.1	加納幽閑子	「地上に樂園をつくる人」 (実話)	『我家』第88号

1924.6.1	加納幽閑子	「荊棘の路」(農村絵噺)	『我家』第88号
1924.7.1	加納幽閑子	「荊棘の路」(農村絵噺)	『我家』第89号
1924.8.1	加納幽閑子	「荊棘の路」(農村絵噺)	『我家』第90号
1924.9.1	加納幽閑子	「荊棘の路」(農村絵噺)	『我家』第91号
1924.9.1	加納幽閑子	「旅のはたごで」(雑録)	『我家』第91号
1924.9.1	加納幽閑子	「ひがし筑摩の兵隊寡婦さん」(実話)	『我家』第91号
1924.10.1	加納幽閑子	「雑草のなかに」(実話)	『我家』第92号
1924.10.1	加納幽閑子	「荊棘の路」(農村絵噺)	『我家』第92号
1924.11.1	加納幽閑子	「大きな温かい手」(実話)	『我家』第93号
1925.6.1	加納幽閑子	「茶の花のやうに(二)」(実話)	『我家』第100号
1925.8.1	加納幽閑子	「米と砂」(絵噺)	『我家』第102号
1925.9.1	加納幽閑子	「荒野を行く」(実話)	『我家』第103号
1925.12.1	加納幽閑子	「四十四の手習ひ」(実話)	『我家』第106号
1925.12.1	加納幽閑子	「米と砂」(絵噺)	『我家』第106号
1926.3.1	加納幽閑子	「吹く風にまかせて」(実話)	『我家』第109号
1926.4.1	加納幽閑子	「吹く風にまかせて」(実話)	『我家』第110号
1926.5.1	加納幽閑子	「強きもの」(絵噺)	『我家』第111号
1926.5.1	加納幽閑子	「五月」(短歌)	『我家』第111号
1926.6.1	加納幽閑子	「ふしぎな力」(実話)	『我家』第112号
1926.6.1	加納幽閑子	「強きもの」(絵噺)	『我家』第112号
1926.7.1	加納幽閑子	「強きもの」(絵噺)	『我家』第113号
1926.8.1	加納幽閑子	「栄光の日」(実話)	『我家』第114号
1926.8.1	加納幽閑子	「強きもの」(絵噺)	『我家』第114号
1926.11.1	加納幽閑子	「貫くもの」(実話)	『我家』第117号
1926.12.1	加納幽閑子	「捨てる」(実話)	『我家』第118号
1927.4.1	加納幽閑子	「長閑な一生」(実話)	『我家』第122号
1927.5.1	加納幽閑子	「炭團」(絵噺)	『我家』第123号
1927.5.1	加納幽閑子	「旅人」(小説)	『同仁』第1巻第1号
1927.6.1	加納幽閑子	「埋められた銀」(小説)	『同仁』第1巻第2号
1927.7.1	幽閑子	「夏山を行く」(短歌)	『我家』第125号
1927.7.1	加納幽閑子	「炭團」(絵噺)	『我家』第125号
1927.9.1	加納幽閑子	「銃は把らねど」(実話)	『我家』第127号
1927.12.1	加納幽閑子	「暮の大掃除」(実用記事)	『我家』第130号
1928.1.1	加納幽閑子	「初春のうた」(短歌)	『我家』第131号
1928.2.1	加納幽閑子	「薫ずる白梅紅梅」(実話)	『我家』第132号
1928.3.1	加納幽閑	「栄光の下に」(実話)	『我家』第133号
1928.4.1	幽閑子	「大将邸の印象記」(訪問記)	『我家』第134号
1928.4.1	加納幽閑子	「小波先生のお母様」(実話)	『我家』第134号
1928.5.1	加納幽閑子	「徹る真清水」(実話)	『我家』第135号
1928.6.1	加納幽閑子	「水無月」(短歌)	『我家』第136号

1928.7.1	加納幽閑子	「山川男爵の母君」 (実話)	『我家』第137号
1928.9.1	加納幽閑子	「秋」 (実話)	『我家』第139号
1928.12.1	幽閑子	「初冬の厨にて」 (短歌)	『我家』第142号
1929.1.1	加納幽閑子	「新塩原多助」 (実話)	『我家』第143号
1929.1.1	加納幽閑子	「日本一の百姓の妻」 (実話)	『我家』第143号
1929.4.1	加納幽閑子	「太陽はかゞやく」 (実話)	『我家』第146号
1930.3.1	加納幽閑子	「かの女達」 (農村絵噺)	『我家』第157号
1931.2.1	加納幽閑子	「日本名婦物語」 (伝記)	『家の光』第7巻第3号
1931.7.1	加納幽閑子	「光を撒いて行く人」 (実話)	『家の光』第7巻第8号
1931.9.1	加納幽閑子	「貧乏村が今は天下の理想郷」 (実話)	『家の光』第7巻第10号
1932.4.1	加納幽閑子	「法然上人とその家庭」 (伝記)	『家の光』第8巻第4号
1932.7.1	加納幽閑子	「文豪小泉八雲夫人の犠牲的生涯」 (伝記)	『家の光』第8巻第7号
1932.8.1	加納幽閑子	「人類学の権威鳥居龍蔵博士夫人の内助」 (実話)	『家の光』第8巻第8号
1932.9.1	加納幽閑子	「禁酒運動の父安藤太郎夫人の献身」 (実話)	『家の光』第8巻第10号
1933.8.1	加納幽閑子	「今日の名誉に輝く両親の教訓」 (実話)	『家の光』第9巻第9号
1935.1.1	加納幽閑子	「村を明るく楽しくする婦人」 (実話)	『家の光』第11巻第1号

【付記】本資料作成においては、国立台湾図書館、石川武美記念図書館、奥州市立斎藤實記念館、国立国会図書館、山武市歴史民俗資料館、東京大学総合図書館、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）、日本近代文学館、宮城県図書館、広島県立図書館、広島大学中央図書館にて閲覧の便宜を得た。記して感謝申し上げます。

本稿は JSPS 科研費 JP21K00265 の助成を受けた研究成果の一部である。

Yukashi Kanō, a Woman Reporter who crossed the Sea:

Focusing on the *Taiwan Aikoku Fujin* Era

Yuka SHIMOOKA

Key Words: woman reporter, *Taiwan Aikoku Fujin*, *Fujin Sekai*, *Waga Ie*, *Ie no Hikari*

Kanō Yukashi was a woman reporter and writer who contributed mainly to women's magazines from 1906 to 1935. In 1910, Yukashi went to Taiwan to help run *Taiwan Aikoku Fujin*, the first women's magazine published in a prewar Japanese colony. She played an essential role in all of *Taiwan Aikoku Fujin's* multiple functions: propaganda for the Taiwan Governor-General's policy implementation, a general literary magazine, and a place for Japanese residents in Taiwan to contribute their writings. After ceasing publication of *Taiwan Aikoku Fujin*, Yukashi returned to the prewar Japanese mainland and contributed articles to *Fujin Sekai*, *Waga Ie*, *Ie no Hikari*, and other magazines. In *Waga Ie* and *Ie no Hikari*, she mainly wrote cautionary tales based on interviews with real people. Her articles, which mainly depict women of substance and sacrificial spirit, are heavily used in the media to promote understanding and cooperation with the system of the state that Imperial Japan demanded of its women.